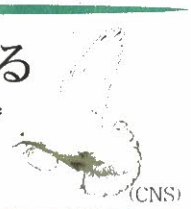
心が心に語りかける

〝第2バチカン公会議の父〟
～ 聖ニューマン ～



(CNS)

(10) 聖ニューマンと教父とのつながり ―④

信仰の感覚1 「神と人間との協働」

寄稿 阿部仲麻呂神父（サレジオ修道会）

「第2バチカン公会議」（1962～65年）の開始から60年を迎える来年10月に向けて、〝第2バチカン公会議の父〟と呼ばれながら日本の教会では思いの外知られていない聖人、ジョン・ヘンリー・ニューマン（1801～90年）に光を当てるシリーズ。10回目は、7回目から引き続き、東京カトリック神学院教授の阿部仲麻呂神父（サレジオ会）に、聖ニューマンと教父とのつながりについて紹介してもらう。信者の持つ「信仰の感覚」に注目したニューマンは、神と人間の協働を重視し「神の恵み」を理解した。

《洗礼の結果、信仰者は福音の真理に対する本能を備え、真実のキリスト教の教えと実践を理解して支持し、偽物を拒絶できます。この超自然的な本能は、教会の交わりにおいて受けた信仰のたまものと本質的に結びつき、『センス・フィディ』（信仰の感覚／sensus fidei）と呼ばれ、キリスト者が預言者としての召命を果たすことを可能にします。

教皇フランシスコは、初めてのアンジェラス（お告げの祈り）の際の講話で、かつて出会った謙虚な年配の女性の言葉を引用しました。

『主がお許しにならなければ、この世界は存在しません』。

その言葉を聞いた教皇は『それこそ聖霊が与えてくださる知恵です』と、感嘆の声を上げたほどです。この女性の洞察が『センス・フィディ』の顕著な現れです。

『センス・フィディ』とは、信仰の事柄に関して一定の識別を可能にするだけでなく、まことの知恵を育み、真理の宣教を生み出します》

ところで、聖ニューマンがキリスト者としての生を充実させるべく自ら思索し、庶民層に向けて幅広く説教を繰り広げて活躍していた19世紀という時代において、「神の恵み」を巡る神学的な立場としては、以下の二つの相反する潮流が激しく闘っていました。

①第一の立場としては、人間側の自由意志に基づく努力によって神の元へと至ろうとする徳（善き習慣を積み重ねると次第に徳が形成される）を重視するあまり、神の恵みには、さほどの注意を向けない視点です。これは、歴史的に見れば、5世紀以降のペラギウス主義の思想的傾向を引き継ぎます。これは「自力主義的恩恵理解」です。

②第二の立場としては、人間が根本的に堕落していることを鋭く指摘することで、いかに善行を積んでも決して神の元には至れない事実を見極め、ひたすら神からの恵みに頼るしか道は残されていないと考える視点です。この立場は歴史的に見れば、16世紀のカルヴァンの予定説や、17世紀以降のジャンセニズムなどの思想傾向に発展します。これは「他力主義的恩恵理解」です。

③ところが聖ニューマンは従来の「神の恵み」理解の二大潮流としての①「自力主義」および②「他力主義」の両極端の立場には決してくみしません。むしろ彼は独自の第三の立場を開きました。つまり、神の恵みに信頼しつつも人間の自由意志でできる限りの努力を積み重ねる視点です。

この立場は古代ギリシア教父やローマ・カトリック教会のトリエント公会議の恩恵論とも一脈通じる方向性を備えました。神と人間との協働を重視したのです。

人間の視点だけで聖書を理解すると…

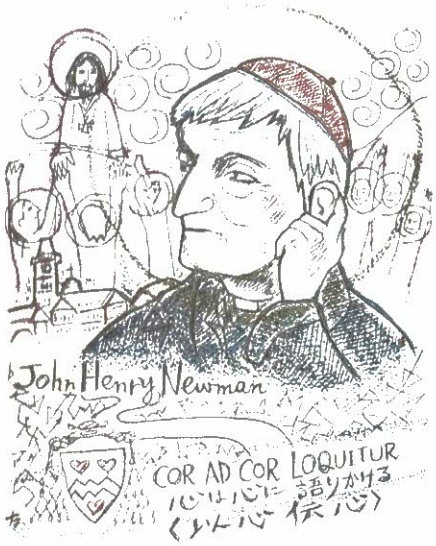
19世紀のヨーロッパにおけるドイツやフランスの神学の主流を一言にまとめれば「イエス伝学の時代」と呼べます。言わばイエスの「人間性」のみに着目して、なるべく人間の視野に基づいて、理性の枠内で解釈を施すことが好まれました。つまり、神学者や聖書学者によって、自然科学的で歴史批判学的手法が選ばれました。

例えばイエスの奇跡を説明する際にも、差し障りのない解釈に終始しました。一番の好例は「湖の上を歩いたイエス」を「浅瀬の岩の上を飛び越えながら渡った」と解釈し、「イエスがラザロを生き返らせたこと」を「イエスの大声に触発されてラザロが仮死状態から目覚めた」と解釈したことです。

人間の生活や心理状態の視点のみでイエスの言動を説明することで、専ら「人間論的な手法」で聖書を理解しました。しかしそうなると、「受肉のキリスト」の神学を打ち立てた古代のアレクサンドレイア学派神学を頂点とする伝統的なキリスト教理解の仕方は崩壊に至ります。（続く）

聖ニューマンは「信仰の感覚」に注目した神学者でした。

教理省国際神学委員会『教会の生活における信仰感覚（Sensus Fidei）』（2014年）は聖ニューマンの先駆的な「信仰の感覚」についての神学を高く評価しました。以下に2項を引用します。



12使徒がイエスと共に生き、派遣され、神の愛の働きである聖霊に満たされる様子を思う聖ニューマン（画・阿部神父）